

氏 名(本 籍)	諸 富 祥 彦 (福 岡 県)
学 位 の 種 類	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 942 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 4 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
審 査 研 究 科	教 育 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	人 間 形 成 に お け る 〈エゴイズム〉 と そ の 克 服 過 程 に 関 す る 研 究
主 査	筑波大学教授 遠 藤 昭 彦
副 査	筑波大学教授 佐 藤 三 郎
副 査	筑波大学助教授 教育学博士 落 合 良 行
副 査	筑波大学教授 教育学博士 片 岡 暁 夫

## 論 文 の 要 旨

本論文は、人間形成における個人の内面に視点を置き、そこにおける自己中心性の克服の根本的解決は根源的〈エゴイズム〉の克服にある、と研究対象を措定して、この〈エゴイズム〉の克服過程を、「主体的経験の現象学」という独自の接近方法に基づいて理論的解明を試みたものである。

本論文の構成は、次のとおりである。

### 序論

第Ⅰ部 〈エゴイズム〉の本質—人間形成の問題として—

第Ⅱ部 〈エゴイズム〉の克服過程—人間形成の探究において—

第Ⅲ部 〈エゴイズム〉克服への教育的関与—人間形成の観点から—

### 結論

本論文は3部9章、本文450ページ、註132ページ、引用・参考文献38ページ、合計620ページ（1ページ1211字で400字詰め原稿用紙約1878枚に相当する）よりなっている。

序論第一章では、本研究の問題意識を述べ、課題設定をおこなっている。

人間の内面には生来、自己の精神的な充実と安定とを他の一切に優先させ、それを究極目的とする根源的自己中心性が潜んでいる。この根源的自己中心性は、それが①「精神的な充実と安定を希求する」という人間精神の根源的な働きそのものに由来することにより「根源的」と名づけ、②そうした仕方での「精神的な自己利益の獲得」を他の一切に優先させることから、一種の利己主義（エ

ゴイズム)と言うに値すると考えた(この根源的エゴイズムを、本研究では〈〉で括って、〈エゴイズム〉と表記している)。この根源的次元での〈エゴイズム〉は、たとえ普通の意味でのエゴイズム、すなわち対人・社会的次元でのエゴイズムを克服しえたつもりでいても、個人の内面に依然、残存する性質のものである。たとえば、「利他的な関心」自体が自己の精神的な充実と安定を得ようとする心の働きから発することが、しばしばあるように。これらのことを顧みて筆者は、〈エゴイズム〉克服の問題を回避しては、「内面」の観点から自己中心性の克服を徹底的に追求したとは言い難いと指摘する。そして道徳教育学の分野においてとり上げられることの多い七人の思想家(ルソー、カント、ペスタロッチ、ヘルバルト、デュルケム、デュイイ、コールバーグ)の人間形成論において〈エゴイズム〉克服の問題がいかに位置づけられているかを検討することにより、この問題がこの分野の人間形成論において主要な問題領域として明確に位置づけられるには至っていないことを確認した上で、〈エゴイズム〉克服の問題を人間形成の観点から追求することを本研究の研究課題として設定している。

序論第二章では、本研究における問題究明の根本態度を検討している。まず、とるべき研究方法として、筆者自身が直面した〈エゴイズム〉克服の問題をその固有性を失わずに捉えるために、理論化以前の直接経験に立ち返り、そこで問題を捉え直す現象学的態度について考察、確定する。すなわち、キルケゴールが言う意味での「主体的」な経験に現象学的省察を加えることから、「主体的経験の現象学」と呼ぶ態度を基底に据えて問題を究明する。

第Ⅰ部では〈エゴイズム〉の「本質」を中心に究明をおこなっている。

第一章では、多様な意味を付与されているエゴイズム概念を体系的に分類すると共に、その各々を、人間形成において真に「克服の対象」とするに足るエゴイズム概念が満たすべき三つの条件(①克服の必要性、②克服の可能性、③克服の意義)に関して検討し、三つの条件の全てを満たしているのは、根源的次元での〈エゴイズム〉概念のみであることを確認している。次に第二章では、〈エゴイズム〉の「本質」の解明を試みると共に、〈エゴイズム〉を存続・維持せしめる「精神的機能」を哲学的人間学及び精神分析学の見地から検討している。

第Ⅱ部では〈エゴイズム〉の「克服過程」を中心に究明をおこなっている。

まず、第一章ではキルケゴール、第二章ではフランクルの実存思想の検討をおこない、〈エゴイズム〉克服の問題現象を本質的な次元で捉えるための「手がかり」として、前者からは「受けとり直し(Gjentagelsen)」の概念を、後者からは「生から問いかけられている者(der vom Leben her Befragte)」の概念を抽出している。その上で第三章において、これらの概念を手がかりとしながらも主体的経験の現象学を根本態度として究明した〈エゴイズム〉の克服過程に関して論じている。ここでは、〈エゴイズム〉の「根絶」は不可能であるが、徹底的な自己変革を経た上で〈エゴイズム〉を「受けとり直す」という仕方であれば、〈エゴイズム〉克服は可能だという考えに立って、〈エゴイズム〉の克服過程を①〈エゴイズム〉への安住、②〈エゴイズム〉の自覚、③〈エゴイズム〉との苦闘、④〈エゴイズム〉の克服、⑤〈エゴイズム〉の受けとり直しという五つのサブ・プロセスに区分して論じている。

第Ⅲ部では、〈エゴイズム〉克服への教育的関与の存り方を検討している。

第一章では、キルケゴールの伝達論、特に「間接伝達 (indirekte Meddelse)」概念の検討を通して、他者に〈エゴイズム〉を主体的に自覚せしめるための一連の方法的諸原則を抽出している。第二章では、クライアント中心療法の理論、特にジェンドリンの「体験過程 (experiencing) 論」の検討を通して、〈エゴイズム〉との「主体的苦闘」をその主体性を損なわない仕方であらう援助するための方法的諸原則を抽出している。

結論では、研究の成果を要約した後、今後の研究課題として、①ユダヤ・キリスト教的な背景を持つ思想のみならず、東洋の諸思想にも手がかりを求めて〈エゴイズム〉克服の問題を追求すること、②本研究の成果を教育場面での実践の方向へ展開させていくこと、等をあげている。

## 審 査 の 要 旨

(1) 今日、道德教育の基礎に据えるべき人間形成論を構想する時、他者との関係を無視しては人間本性を破壊することになるという人間の基本的存在構造に即しつつ、自己中心性の克服を追求することが必須の課題として要請される。本論文は、この自己中心性の問題を人間の内面の深部にまで掘り下げて根源的〈エゴイズム〉として捉え、その克服を人間形成にとって不可避の課題として追求することにより、上述の要請に応えようとしている。〈エゴイズム〉克服の問題は人間形成上きわめて重要な問題と考えられるにもかかわらず、これまで教育学では、この問題に正面から取り組んだ研究はみられないことから、本論文はきわめて大きな意義を有するものと評価しうる。

(2) 本論文では、キルケゴールやフランクフル等の実存思想の検討から抽出した基礎的な概念や論理に手がかりを求めつつも、「主体的経験の現象学」という接近方法により筆者自身の経験に徹底的な省察を加えることを通して、五つのサブ・プロセスから成る〈エゴイズム〉の克服過程に関する仮説を提示し、その自己変革のありようを考察している。この点も従来の研究にみられぬ独自の成果として評価しうる。

(3) さらに本論文では、これまで主に宗教や哲学の分野で論じられてきた〈エゴイズム〉克服の問題を、第Ⅰ部及び第Ⅱ部での検討成果を踏まえて、第Ⅲ部では教育的関与の方向に発展させている。この点も教育学論文として評価に値する。

ただし、(1)〈エゴイズム〉の問題を個人の内面の方向へ掘り下げることに専心するあまり、対人・社会的な側面との関連において論究することが弱くなった点、(2)第Ⅲ部での考究が理論的諸原則の抽出にとどまり、具体的な教育実践の次元にまで下ろして論じていない点、等是否めない。今後、これらの点については引き続き十分な研究をおこなうことが望まれるが、本論文の全体としての評価を左右するものではない。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。